

最後の砦

新年度。首長として職員への初訓示で何を話そうか。

毎年思いますが結構しんどい。そうだ、と思いついて「国会での雪解け問答」と題するコラムから切り出しました。『雪国大全』（佐藤国雄著）という本を紹介したもので、特に昭和52年の衆院予算委員会、新潟県選出の木島喜兵衛衆議院議員が後に総理となった海部俊樹文部大臣（当時）との質疑の場面がおもしろい。

（以下原文）「木島「もし雪が解けたらどうなる、という試験問題が出たら大臣はどう答えますか。」文相「私は水になると答えると思う。」木島「一般にはそれが合格。が、わが新潟は豪雪で春を待ちわびています。雪が解けたら春になる、と答えたら、それは誤りになるのです。雪が水になるのは《理》の世界、春になるのは《情》の世界です。同じノーベル賞でも湯川さんは百点で、川端さんは零点。…」話はここから試験偏重の学歴社会批判の問題に進むのですが、それとは別に、私はこの話が市

政運営に当てはまると思ったのです、と職員に向かって語りました。

当然ですが、行政は厳格な公平さや公共性がなければならぬ『理』の世界。しかし、時に解決の難しい対応も数多く、人の営み・生活は理屈だけでは通らないことのと多量なことか。『情』なくして人の心は動かない。情とは共感する力ともいえる。血の通う行政、市民との信頼感、理と情のバランスによる、と思うのです。新型コロナウイルスとの長い闘いの中で市役所も格闘してきました。市民の不安や、やるせなさの当たり所にされたこともなかったわけではない。しかし、市民に寄り添う、その一念で踏ん張ってきた職員のみなさんを誇りに思う。確信したことは、市役所は市民の「最後の砦」だということ。私がコロナ禍の3年間、多くの場でみなさんを鼓舞し、言い続けた言葉であるしこれからも、と。訓示というより感謝の弁だったかもしれません。新入職員は58人。公務員生活の初日。彼らがどんなふうを受け止めてくれただろうか。

シリーズ 第121回

国際大学留学生 お国自慢コーナー ~boast of my country~ トルコ共和国 メルテム グルブズ さん



私の国はこんなところ

トルコはアジアとヨーロッパにまたがる国で、2つの大陸の架け橋となっています。そのユニークな立地から中東、地中海、アジア、ヨーロッパの文化が混ざり合い、その多様性はトルコ料理にも表れています。エーゲ海地方では緑豊かな料理やオリーブを使った前菜が多く、中部のアナトリア地方はパン屋が多いことで知られています。黒海地方ではアンチョビを中心とした料理が有名です。少し前に

大地震に見舞われた東部と南東部のアナトリア地方では、スパイシーな肉料理が人気で、全国的に最もホスピタリティに溢れる人たちが住んでいます。

南魚沼市に住んで感じたこと

私は黒海地方の出身です。幼少期を過ごした故郷は、静かな田園風景と緑の山々、そして国内で最も降水量が多いことで有名です。この13年間はイスタンブールに住み、混沌とした都会での生活を経て、南魚沼に来ました。私の原点を思い出させてくれるこの街に、幸せを感じています。雄大な八海山や自然に囲まれ、静かに自分自身と対話ができ、有意義な1年でした。



編集後記

以前に勤めていた会社の同期に思いがけなく会う機会がありました。短時間でも新卒当時の気持ちがよみがえり、とてもパワーをもらうことができました。5月は新年度の環境の変化などで疲れが出やすい時期だと思えます。長引いたコロナ禍でなかなか会えなかった親戚や友人たちとの再会をし、リフレッシュをしていきたいです。(S.K)

今月の表紙

4月10日(月)、後山小学校で入学式が行われました。5人の新入生は名前を呼ばれると元気に返事をして、これから始まる学校生活を目を輝かせていました。

市民の動き 令和5年3月末日現在 ()は対前年比

●人口 53,665人(-243)／男 26,264人(-128) 女 27,401人(-115) ●世帯数 20,287戸(+9)